



妙たえの光ひかり

通刊52号 復刊31号
2000年10月20日(季刊)

角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜 〒953-0011
TEL 0256-77-2025

曼まん珠じゆ沙しゃ華げ

「彼岸花」の名前があるように、秋の彼岸の頃、墓地や土手などを彩るように群がり咲く。茎をまっすぐ伸ばした先に真紅の花びらが輪状に開いた、あの独特の姿には妖艶な美しさがある。曼珠沙華とは梵語（仏教で使われるインドの古い言葉）で赤い花の意味があるという。

妙光寺も墓地や境内に咲くが除草剤のせいもあってか、以前に比べてめつきり数が減った。今年の彼岸には見られなかったので絶えてしまったかと心配したら、十月に入って咲いた。暑い夏で開花が遅れたらしい。

彼岸に墓地で咲くせいか一般に忌み嫌う不吉な別名も多く、四音以上の方言名があるという。

弁柄の毒々しさよ曼珠沙華 許 六

曼珠沙華抱くほどとれど母恋し 中村汀女

一心に仏を見奉らんと欲して

自ら身命を惜しまず

—— 妙法蓮華經如来寿量品第十六 ——

小 川 英 一

この「妙の光」は、先代住職が発行していたものを復刊して始めたものです。今回はその昭和四十八年六月一日発行の第二十二号を再録してお伝えします。これは先代住職が亡くなる八ヶ月前、六十五歳のときです。

寺の境内に二百年以上へた松の老木が何本もある。木が弱ったせいかな啄木鳥きつぎがきていくつも穴をあけてある。ある時、椋鳥むくどりの呼声こゝろがあまりけたたましいので、私は外へ出て見た。殆ど垂直に立った二抱ふたかかえもある大木の十メートル位の高さの穴へ向って一匹の蛇が静かに用心しながら上っている。その穴には椋鳥の巢があつて玉子か離ひらがあるらしい。近くの枝にいる椋鳥がけたたましく呼び騒ぐのはそのため、時々上の枝から落石のように急降下してきて蛇に体当たりしようとする。蛇も鎌首かまづねをあげて防戦するのでなかなか当たらない。初は二羽で交互に急降下していたが、急を聞いて応援にかけつけた数羽も交つて幾

度となく体当りを繰り返している。遂に当たった。蛇はもんどり打って地に落ちた。この間凡そ十五分。素晴らしい情景に見とれていた私は拍手を送りたい程感動を受けた。

最近ニュースを賑わしている棄児や嬰兒殺しと対比して、人間の文化とは一体何だろうと考えさせられる。文化が発達したとか、社会が進歩したとか言っても、自分のことは大切にしながら人の命を軽視しては人間は破滅であることに気付かない親に椋鳥の糞を煎じて飲ませてやりたい。

涅槃經に、貧女が児を抱えて河を渡つたが水流が激しくて押し流されそうになった。抱いた児を離せば助つただろうにこの母親はますます強く児を抱えたため、遂に母子共水死してしまつた話が記されていると日蓮聖人は開目鈔に述べておられる。真実を求める人の態度はこの貧女が児を愛念する如くであれとのたとえである。日蓮聖人はこれを評して「詮んじつめて言えば、貧女がただ一筋に子を思ふ慈しみの心より外にない。仏の慈悲によく似ている」と仰しやつておられる。

標題の言葉は日蓮宗徒なら大部分の人が読むお自我偈の中の有名な一句である。「仏を見奉る」とは仏さまの真のお心持ちを充分に理解するということである。仏さまのおさとりを自分のさとりとして心に把握することである。真の幸福をつかむことである。そのためには貧女がただ一筋に児を念うように、椋鳥が巢を守つて蛇に体当りを挑むように、ひたすらな決意と行動がなければならぬと教えられた言葉である。日常の仕事にしても小手先の器用や要領で上手にこなす人がいるが、体当りでなければいい仕事は出来ないとの教えであるとも受けとれる。先の日蓮聖人のお言葉から、その体当りの根底をなす源動力は「慈悲」である。児に対する「愛情」である。仕事を大切にする「情熱」であると理解される。

受付の名コンビ

西川町 寺尾 義夫さん(70才)(写真右)
 卷町内 藤 其五郎さん(65才)(写真左)

妙光寺では年間に九回の行事がある。そのうち正月を含め、六回の受付係を担当しているのがこのお二人。

元旦の朝九時から始まる年始受けが一番忙しい。檀家も多いがそうでない地元角田浜の人たちも多く来るうえ、安穩会員と信者も加えて百五十人以上にもなる。次に忙しいのが八月一日のお盆参り。この日は朝六時から檀家を中心にお墓参りの人が多い。他に年会費の受付もあるから応援も頼んで三、四人で応対する。

春秋のお彼岸と秋の日蓮聖人ご命日のお会式はやや少なめで、ほとんどが顔見知りの檀家。いっぽう八月一日の岩屋七面様祭礼は、普段見かけない信者が大半だから神経も使う。ことに今年は本堂の上棟式と一緒にだったからこった返して大変だった。

寺尾さんは四十年勤めた農協を定年

で辞めた翌年、やはり長年受付係を担って今年亡くなられた高橋強さんに声をかけられ、手伝ったのが始まりだった。今年で九十年になる。「叔父がやはり長年やってたのを覚えてますからご縁かと思つて引き受けたんですが、もうそんなになりますか」と。奥さん、長男夫婦と孫二人の六人家族。以前に胃の手術をしたが、先日も小学校の登山遠足の同伴を頼まれるなど元氣。

内藤さんも二十九年間勤務した青果市場を定年退職した翌年、「法事の席でご前様に頼まれたのがきっかけでしたね。あれから四年ですよ」と。現在長男夫婦が東京、次男夫婦はベトナムのホーチミン総領事館に領事として赴任中なので、奥さんと二人暮らし。奥さんは妙光寺先代住職の中学の教え子で、その世話で結婚されたという。



「いつもの人が高齢で来れなくなつて顔が見えないと寂しいね」と寺尾さんが言えば、内藤さんは「それもあけれど安穩廟のおかげで新しい顔ぶれも増えましたよ。この前なんかここで突然幼なじみに声をかけられました。聞けば安穩廟を申し込んだというんです。初対面の奥さんは私の弟と同級生と聞いてなおびつくりでした」。

ものごしの柔らかいお二人だから、お寺の受付係は適任のようだ。



上棟式他

八月十九日 新本堂上棟式

新本堂の上棟式が連日の猛暑で当日も快晴のなか、檀家、安穩会員、地域の人たち多数が集まり、それは盛大に行なわれました。

午後一時半、大広間を会場にして、工事説明を以下の方達にお願いしました。全体報告―住職。設計―茶谷正洋、中沢敏明。構造設計―梅沢良三。造園設計―野沢清。施工会社々長―加賀田亮一。現場責任者―山田茂。仏師―石川真水。それぞれの分野では名のある方ばかりですが、易しく説明くださり有意義な場になりました。

二時からの上棟式は、新本堂前に設けた壇上に檀家役員と、工事関係者六十人



が着座して準備完了。式衆八名が「新濁常起会」の威勢のいい木遣りを先頭に入場し、法要が始まりました。読経とともに数千枚の五色の紙でできた花びらが撒かれ、日蓮宗大荒行堂伝師の戸田僧正の修法、住職の工事安全祈願。引き続き正装した宮大工の棟梁を先導に、地上の人も下の人も全員で百メートルの綱二本につかまり、棟木を引き上げる「棟上げの儀」に参加。そしてそれを打ち固める「槌打ちの儀」が行なわれ、無事決まったところで青空にパパーンと火花が響きました。

さらに縁起物の五円玉が妙光寺の年齢数六八七個と、お餅とお菓子が壇上から撒かれて最高潮に。最後は全員の手締

めで無事終了です。祝賀会では工事関係者、檀家、安穩会員、スタッフ入り混じって二百人と賑やかでした。

一連の様子はビデオで記録しており、一年間の工事記録にまとめます。

仏像奉納締め切り

新本堂にお迎えする新しい仏様として、四体の菩薩像を奉納いただきたいとお願いしていました。おかげさまで多数のお申し出をいただき、四体全部が決定しました。三人の方が一体づつ、十人の方が共同で一体、檀家と安穩会員です。驚くほど順調で、皆様のお志に深く感謝しています。ありがとうございます。完成は平成十四年になります。

鎌田上人結婚

鎌田上人が先頃、燕市生まれの小出晃代(てるよ)さんと結婚しました。十月二十日、お世話になってるご住職方と檀家役員五十人でお祝いの会を開きます。

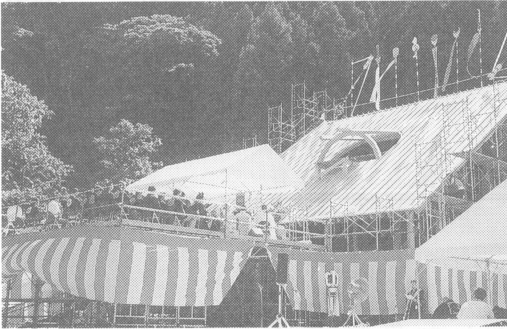
今後は通勤で妙光寺に勤務します。

上棟式スナップ

工事進行説明会



全員着座で開式を待つ



木遣りを先導に式衆の入場



木剣による修法





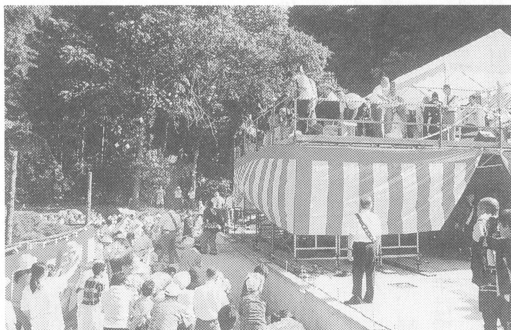
住職による工事の安全祈願



檀の上の人も下の人も一
緒に「引き綱の儀」



盛大に餅撒き



祝賀会は二〇〇人を越した



フェスティバルと句集



八月十九日、新本堂の上棟式にあわせて第十一回フェスティバル安穩を開催しました。例年の語り合いの会場がないこともあって、変則的な形ながら多くの方が参加されました。

この日は午前の岩屋七面様の祭礼、午後から上棟式、安穩法要、そして夕刻から祝賀懇親パーティーと盛りだくさんの日程でした。それぞれ性格の違う行事ですが、参加する人が入り混じって交流できたという目論見が成功だったようです。

檀家で初めて安穩法要に参加した方から「いいもんだねえ」と感想が聞かれました。また午前中の岩屋七面様祭礼に参加された会員からは「幻想的で感動しました」と言う声も。そして二百人参加の

パーティーの席ではお酒も入って見事に檀家と安穩会員が賑やかに交流し、あちこちで話はずんでいたのが印象的でした。この縁がまた繋がっていくことでしょう。

宿舎の用意をせず各自で手配いただきましたがそれなりに好評でしたし、ロソク献灯が一九五本もありました。一方で法要が日の高い時間で暑かったこと、行事が多くて打ち合わせが不十分なため、一部で法要がスムーズにいかなかったことなどが反省会議で出されました。新本堂となる来年からの内容に期待してください。

この夏、横浜の土佐与四治さんが「あんのん」と題した、筆文字で手製の

句集を届けてくださいました。その一部をご紹介します。

人集い角田の里のフェスティバル

明るい笑顔 談笑の声

法会済み 互いに笑みをうかべつつ

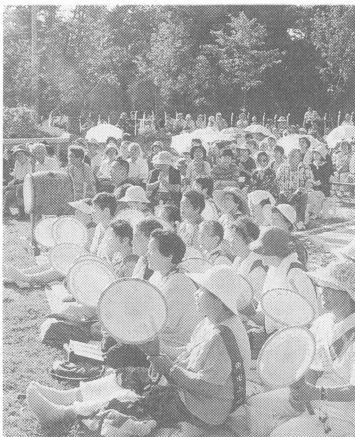
次回の再会 語る人々

朝露を 踏みて詣でる己が墓

老いし妻 伴いまいる妙光寺

手を合わす 妻の肩先赤とんぼ

八十三歳の土佐さんは足がご不自由ながら、軽動車を運転して毎年来られます。近年は重い痴呆症になった夫人をいたわりながらの参加です。



秋に想う

小川 なぎさ子



このまま日本も熱帯になってしまおうのではと思うほどの暑い夏でした。雨も降らず、汗ばかりがダラダラと流れました。秋風の吹く今頃に夏の疲れはでていますか。

妙光寺で体調を崩したのは住職と、玄関番のポチコという犬でした。ポチコは高齢で肥満もあり、突然立ち上がることもごはんもたべらなくなつて、動物病院に行くとそのまま十日間の入院となりました。

動物が好きというより、来るのを拒めない優柔不断な性格なのかもしれません。世話をした動物は多数。だから当たり前のごとく順番に死をむかえ、取り乱すこともなく自分では受け入れて来たつ

もりでした。生か死か、動物ははつきりしています。

ポチコもこれが寿命ならばとあきらめながらも、苦しそうな様子が可哀相でした。点滴をぶら下げ、声をかけてもうつすらと目を開けるだけで、獣医師も「あまり状態はよくありません。」との事。最期はお寺で、私のそばで看取りたかったので連れて帰りました。居間の片隅に寝床をつくり、家族と一緒に過ごさせてやるつもりで準備をして。

赤ん坊の面倒を見ているとき、どんなに疲れていても「うえーん」と泣くと日がさめたように、夜中にポチコがウンチがでたくて騒ぐと、さっと目が覚めました。

ところが一週間ほどたち、自分で立ち上がろうとしたので、庭で排泄をさせたのをきつかけに、ぐんぐんと回復したのです。ポチコに忍びよった死の影は消えました。友人から「在宅介護だね」と言われ「そういえばそうね」と笑いました。一方で、ポチコに代わり新しい玄関番になったのがハチです。この犬は娘たちの通う中学に迷い込んできた野良犬で、七月にお寺に采たばかりですが、年齢は八歳（推定）。目も悪く、耳も遠く、まぬけな犬です。散歩途中で目の前の岩に頭をぐーんとぶついたり、ガツガツしている変な犬ですが、これも縁とよろしくお願ひします。

透明な暗闇にそつと香るキンモクセイ。草むらで鳴く小さな虫たち。秋の夜長にヒト以外の命について考えてみようと思います。



行事案内

お会式(おえしき)と「ひとり芝居」のご案内

弘安五年(二二八二)十月十三日にご入滅された、日蓮聖人の第七百十九回忌の法要(お会式と呼びます)を左記のように営みます。

あわせて午後からひとり芝居を上演します。ありがちな難しいものでなく、涙あり笑いあり、楽しみながら人生を考えさせられる、そんな芝居です。

午後からだけの参加でもかまいません。お友達お誘い合わせおでかけ下さい。

日時 十一月五日(日)

午前 十一時 お会式法要

昼 十二時 お齋(おとき)

午後二時半 ひとり芝居 愚安亭 遊佐(ぐあんていゆうざ)

会場 妙光寺

会費 一人 三千円(お齋料含む) 午後からの方は千円

当日受付でお願いします。

申込 お済準備の都合上午前のお会式から参加の方のみ、各地区世話人か、直接

妙光寺へ電話にてお申込ください。

※ 来年度の岩屋七面様のほり旗、奉納受付中です。一本二千円。

※ 日蓮宗新聞をご購読の方は、代金三千六百元お願ひします。



あ・と・き
が・き



本当に暑くて大変な夏でした。そのせいか九月に入って体調を崩し、彼岸前の発行がとうとうできませんでした。夏の疲れが弱い胃腸にきたようです。お詫び申し上げます。今は回復し十月は立正大学で、十一月には比叡山で天台宗僧侶の研修会で講演依頼され、張り切っています。

お願いした四菩薩像もすんなりまとも感謝し、喜んでいきます。「ご前様の顔を思い浮かべるとなんか協力したくなるんだよね。あんた徳があるんだわ」と檀家の女性が言ってくれました。恐縮至極です。

工事の方も順調です。十月二十三日からはいよいよ回廊の工事が始まり、お会式の頃には外観が整います。ぜひお出かけください。

小川